
東方幻想主

88813

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想主

【Nコード】

N1911BA

【作者名】

88813

【あらすじ】

博麗神社の祭神「博麗の大神」他結構な人数のオリキャラが、幻想郷でハートウォームなフルボッコをしつつ過ごして行くお話。弾幕はもっと放てる！ 身体はもっと避ける！

00…登場人物

博麗の大神（はくれい の おおかみ）

主人公にして最大の問題児。博麗神社の祭神なのだが、かなり昔から博麗神社を離れてわらわらやっていたため殆どの巫女が存在すら覚えていない。

元々人から神に「成り上がった」存在であり、信仰で力が増減したりする事は殆どないとのこと。

能力は「事象を司る程度の能力」

魂魄幻夢 こんぱく げんむ

白玉楼に仕えている事になっている半人半霊。大神と付き合いの長い友人であり、剣の使い手。常に腹に一物据えているようで、案外そうでも無い。

なお、白玉楼の庭師の妖夢は彼の妹である。

能力は「物体の切れ味を良くする程度の能力」

弓張 光 ゆみはり ひかり

紅魔館の「完璧で隙の無い執事」

目つきが悪く、寡黙で、表情は乏しいのだが案外適当で常識人。完全で瀟洒なメイドのうっかりをさりげなくフォローしつつ、門番と共にシエスタを楽しむさり気なく最も自由な執事。

能力は「あらゆるものをキャンセルする程度の能力」

弓張 影
ゆみはり えい

紅魔館の「完璧で隙の無い執事」の弟。

とある理由で紅魔館を去り、迷いの竹林で迷っているところ、輝夜と妹紅の殺し合いにばったりと出くわし、気が付いたら永遠亭か妹紅の家に居つくようになった。兄とは違い、表情豊かだが若干短気。能力は「あらゆるものを蓄積させる程度の能力」

柚木 誠
ゆずき まこと

魔法の森に住む魔法使い未満の少年。

「魔力環境の理」という半ばチート染みた理論で魔力を供給する事が出来る。

能力は「魔法を理論化し、扱う程度の能力」

00：登場人物（後書き）

登場人物紹介というわけでした。オリキャラ沢山ですが、よろしく
お願いします！

01::5. 1. 1.

世の中には、あらゆる者を全て受け入れる「幻想郷」という土地が存在する。そこでは、人、神、霊、そして……妖が共存しており、恙無く生活していた。

そんな土地には、博麗神社という神社が幻想郷の外れにひっそりと存在する。お世辞にも規模が大きいとは言えない、むしろ廃れており、まともな運営がされているやもわからない。何を祀っているかすらわからないとまで言われている神社である。だが、その神社は幻想郷と外の世界を隔絶する「博麗大結界」の起点にもなっている。

そしてこれは、その神社に祀られているとある大神が、幻想郷に戻ってきた頃の話になる。

「げえ、俺が少し出ている間に神社が寂れちゃった。」

そんな情けない声をあげるのは、博麗神社の祭神……博麗の大神であった。

「外」の時代は既に平成という年代に突入しており、近代化の波が田舎にも押し寄せている頃の夜の事である。大神がたまたま友人と「里帰り」を敢行しようと山奥の神社へと足を運んだ時の事だった。神社には、誰も居なかったのだ。人っ子一人。それどころか、雑草がわらわらと生い茂り、最早廃墟と言われても謙遜ない様な神社が目に入った。

そこにはかつての面影も無く、只々無残に時に残された神社がぼ

つりと、淋しそうにあるだけだったのである。まさか大神自身も、これが自分の神社であるはずがないとタカをくくっていたが、この辺りに神社は一箇所しか無く、他に動いた気配もなかった。

「うわ……こりゃあ酷いな。大神、どうする？」

そう、さほど心配しているようには聞こえないような声色で、友人が彼に問いかける。友人……魂魄幻夢は、賽銭箱があったであろう石段に腰掛けながら、上着のポケットに入っている煙草を一本取り出し、啜えた。そのまま火をつけようとしたが、当の大神も煙草を取り出そうとしているため、しばし待つ。

「まさか五百年くらい空けたら神社がこうなっているとはなー。ま、結界用の札を貼っているみたいだし、恐らく無くなっている訳では無いんじゃないかね。」

そう口に出し、大神は啜えていた煙草に火をつけ、紫煙を肺へと送り込む。そのままぷはあと吐き出しながら、幻夢に問い掛けた。

「お前さんはどう見るよ。幻夢。」

「そりゃあ結界があれば、考える事は一つじゃないのか？ 相棒。」

そう問いかけに返し、幻夢はニヤニヤと笑いながら煙草の煙を吸い込み、一段落つけると月を見上げた。

その姿を見た大神は悪戯っ子のような笑みを浮かべ、やはり月を見上げた。紫煙が、闇夜へと吸い込まれて行く。二人は虫の鳴き声を聴きながら煙草の火を消し、結界用の札を見据えた。

「だよな相棒。結界があるなら、すり抜けてやるのが人情って奴だな。」

「その通り相棒。結界はすり抜けるものだろ？」

そうやりとりをすると、彼等は結界を抜けるための行動に移った。その方法は、結界へ降り注ぐ月の光に自らの神力・妖力を乗せ、一定量を送り込んだら、自らの身体を転移させる方法であった。

結界というものは、理論の産物である。完全に隔絶する結界というものは存在しないというものが、その理論の根底に存在する。何故なら、完全に隔絶するという事は大気や光をも遮るという事に繋がるからである。結界の内部に生命が存在するならば、生きる為に最低限必要とされる大気や光は通さないとならないのである。また、月光というものは、魔力性を帯びてるとされており、まず確実に結界を通り過ぎるものと考えられている。何故なら、大抵こういう結界を張る者は魔力であったり妖力を供給する為の手段を得なくてはならない。少しでも多く供給するのならば、月光の魔力性は欲しがるというのが定石だ。

少なくとも、そうであると二人は経験から考えていた。だからこそ、すり抜ける為の手段であった。過去に結界を抜ける為、様々な方法を施行した中の、最もセオリー通りの行動であったのである。力を送ってから数十分経った頃、二人は結界を抜け出すことに成功したのであった。

01::5. 1. 1. (後書き)

5. 1. 1. / d.j. n a g u r e o .. b e a t m a n i a I I D X

この曲は、beatmania IIDXシリーズの最初期に収録されたものである。この物語の導入に相応しいタイトルとして、この曲を選ばせてもらった。

この作品は、各サブタイトルでBEMANIシリーズの曲名をタイトルとして進行していく。機会があれば、是非とも聴いて欲しい曲である。

と、硬い感じはこちらで終了で、読んで頂き、誠にありがとうございます！ 穴だらけの理論を述べたりしますが、それについてはご都合主義という事にしていただけると嬉しいです。

毎話毎話、サブタイトルの曲についての解説とかもあとがきでやりますので、そちらも読んで頂けると幸いです。

02::coming true

身体がぐにやりと引っ張られていく感覚。いつもの二人のセオリ通りの行動とは言え、この感覚には慣れないと二人は感じた。そして地に足が付き、あたりを見回すとそこは結界の内部である事が感じ取れた。結界の外よりも生い茂る山林、多少は「マシ」になった神社がその証拠である。

「どうやら成功したみたいだな。俺は我が家で寝るとして、幻夢はどうする？」

「んー、とりあえず彼岸を目指すかな。」

「あー……そう言えば……。」

大神が幻夢に問いかけると、幻夢は多少バツの悪そうな顔をしながら答えた。本来ならば彼は彼で、冥界に存在する御屋敷……白玉楼へと戻る事になる。と言うのも、過去に白玉楼へと足を運ぼうとした際、どう言う訳か戻る事が出来なくなったのだ。その時は丁度近くを通りかかった死神を捕まえ、理由を説明させると白玉楼はつい最近、別の場所へと動いたと言う。およそ百年前の事である。

実際のところ、幻夢はほぼ家出同然で白玉楼を出たのであるが、ちよくちよく折りを見ては戻っていた。しかし、白玉楼自体に行けない事になってしまった為、それ以降会う事は出来なかったのだった。

それを察した大神は、少々バツの悪そうな顔になったが、幻夢自身は気にしない様に続けた。

「ま、最悪彼岸から経由するだけだからな。そんなに辛くはないでしょ。」

「まあ、閻魔様に睨まれなけりゃな。」

「と言う事だ。悪いが俺はもう出るぜ。」

気をつけるよ。と言投げかけると、幻夢は夜の帳を落とした山道へと消えて行った。本来ならば、結界の内部がどのようなになっているかを把握しないで動き回るなど言語道断である。しかし幻夢はおろか大神も、その辺りの野生の生き物や妖に遅れを取るほど弱いと言うわけではない。自衛の手段は持ち合わせているのだ。だからこそ大神は幻夢の姿が消えるのを確認すると、神社の本殿へと踵を返すのであった。

「さて、久しぶりの我が家でどう過ごすかなー。」

そう呟きながら本殿へと入ろうとすると、目の前から光る弾の様なものが彼目掛けて飛んできた。すぐさま横へ飛んで避けると、本殿の扉が開く。そこには十代半ばと言えるほどの少女が仁王立ちしていた。

「こんな夜に堂々と神社の本殿に入り込もうとするなんて、余程命知らずの馬鹿なのね。」

んあ？ と、すつとぼけたように弾を放った主を見据えると、彼女はさらに攻撃を加えようとしていた。

「おい待ちな。俺はこの神社の祭神だぜ？ 勝手に住み込んで本来の主を追い出そうとはいいい度胸じゃねーか。」

「何言ってるの？ あんたは。この神社はね、信仰を忘れ去られてしまつて、最早何を祀っているかも誰も知らないのよ。」

「な、なんですとおー！ー！っ！ー！！？」

その直後、情けない大神の叫びと共に、大量の弾が彼へと襲いか

かったのであった。あまりの出来事に呆然とした彼は、回避すると言う事を忘れ……見事に全弾ぶち当たるというミスをやらかしてしまったのであった。

「……おい、手加減しろよお前。」

ボロボロになりながら力なく反論すると、少女はあっけらかんとう返した。

「嫌よ。何で敵に対して手を抜かなくてはならないの？ それに、私はお前って名前じゃないわ。博麗霊夢って言う素晴らしい名前があるの。」

「博麗……もしかしてお前、ここの巫女か何かか？」

そうね。とピシヤリと返されると、大神はむくりと立ち上がり、ズカズカと本殿へと入って行った。あまりにも突飛な行動に、霊夢は目を点にしてしまったが、すぐに冷静になると、こう怒鳴り散らした。

「あ、あんた！ 勝手に神社に入らないでよ！」

「知るか！ 俺は元々ここの祭神だ！ と言うか巫女、霊夢とか言ったっけか？ お前はまず自分の神社が何を祀っているかを覚えてから仕事しやがれ！ 今からこの俺様がここの祭神である事を証明してやる！ 主に話し合いでな。」

霊夢の怒号に対応するかの如く、大神も怒鳴り散らしながら本殿の中心に座り込んだのであった。

02::coming true (後書き)

coming true / GUROOVY vs. L.E.D..
jubeat ripples

coming trueには、〈願いが〉実現すると言う意味がある。大神は自らの神社へと戻るという願いが実現した。幻夢もきつと、白玉楼へと戻るという願いが、実現するのだろう。

楽曲としては、恐らくあまり馴染みのないジャンルの曲になってしまうが、曲の盛り上がりなどが分かりやすく、お勧めの一曲である。

この曲は本当に好きな曲ですけど、ジャンルのにはハードコアになるのなあ？ jubeatでは上下左右対称の回転譜面で、Lv.9ではかなり面白い譜面だと思えますよ。
こんな感じですがよろしくお願いしますー。

03..A b y s s

結局、このまま睨み合っても何の意味もないと判断したのか霊夢も大神につられて本殿へと足を踏み入れる。ふてぶてしくあぐらをかいて、大神が口を開いた。

「さて、まずは白麗の巫女……まずは就任おめでとうと言ってやるか。良かったな。これから俺様に仕える権利をくれてやる。」
「のっけから凄いことを吐いたわねあんた。」

いきなり何をと霊夢は毒づこうとするが、それを腹の奥に仕舞い込み、別の言葉を吐き出した。と言うのも、先ほどの大神の発言が原因である。口からでまかせかもしれないとは言え、自らを「白麗の祭神」と称したのである。それに対し、彼女は何とも言えない「説得力」を感じたのだ。

神という存在は、様々なものに宿るとされてきている特性からか、この幻想郷でもよくという程ではないものの、見られる。不意打ちの霊弾を避けてみせたり、今同じ場に居る事でひしひしと感じる神プレッシャーの圧力。少ないものの、少なくとも彼が妖怪では無いということは理解できていた。

「冗談はさておき……だ。改めて俺はこの白麗神社の祭神だ。大神とでも呼んでくれ。」

「全く……。私はこのこの巫女、白麗霊夢よ。で、あんたがこの神社の祭神である証を見せなさいよ。」

殺伐とした雰囲気の中二人が自己紹介をすると、霊夢が祭神である「証」を見せろと言う。やはり心の底から信用していないというのが、言葉の端からとれた。証を見せろと言う事が、まさに

それを物語っていた。

祭神の証とは、神社に祀われている御神体の事である。外の世界においては神が受肉出来るほどの信仰が無いためか、御神体は安置されているものであるが、受肉した神の場合、それらを持ち歩く形になるのだ。御神体が無くとも力は発揮できるものの、発揮できる力が弱いのである。受肉している神の場合、例えば彼と旧知の間柄にある戦神は鏡、崇神は帽子がそれぞれ「証」となるのである。

勿論の事ながら、大神も持ち歩いていて。首からかけている陰陽玉のネックレスである。それを霊夢に投げ渡すと、彼女はキャッチしてまじまじと見つめた。

（ふう、ん。うちの御神体が何だか分かりはしないけど、確かに御神体ではあるわね。）

ある程度見回した所だろうか、霊夢が大神に陰陽玉を投げ渡した。ひょい。と投げると、陰陽玉は綺麗な放物線を描き、大神の手へと……収まらなかった。と、言うのも突然何もない空間で陰陽玉が消え去ったのだ。いや、飲み込まれたという方が正しいか。なにやら隙間みたいな空間へと入って行った。

それを目の当たりにした大神は、ふう。とため息をつく、何もない空間へと両腕を突っ込んだ。それを見た霊夢は何をしているのかと呆れそうになるが、その腕の所在を見ると、まさに文字通り「消失」している。空間の隙間に文字通り腕を入れている光景をまじまじと見つめ、少なくとも目の前に居る「神」は、「異常」なまでの力を持つ存在である事を確認した。

霊夢は、ありとあらゆる「境界」を操る程度の能力を持ち、妖怪の賢者と呼ばれる知り合いの大妖を持つ。恐らく、彼の陰陽玉の軌道上に「スキマ」を開いたのは、その大妖である事は疑いもしなかった。しかし、目の前の神はそれを見せられて、取り返そうと空間の「スキマ」へと腕を突っ込んだ。本来ならば、「それ」は大

妖の専売特許である筈なのに、彼はそれを当たり前の様に行っただ。その大妖が弱かったからではない。むしろ弱ければ大妖である筈もなく、ましてや賢者とも呼ばれない。恐らく自らが本気を出しても攻略が難しい能力をいともたやすく、しかも正面から相手と同じ方法で破る彼の方こそ、異常なのであった。

少し時間がたった頃だろうか、大神がまず右腕を引き抜くと、その手には飲み込まれた陰陽玉が握られていた。彼が右腕を全て引き抜くと今度は左腕である。そのまま空間から金の髪色をした女性が、力なく本殿の畳へと引きずられた。

「おい、御神体を勝手にスキマ送りにすると神罰を落とすって言っただけだよ？　八雲のスキマ。」

その女性の名は……八雲紫。幻想郷の管理者にして、妖怪の賢者であった。

03::Abyss (後書き)

Abyss／dj. TAKA..beatmaniaIIDX 5t
hstyle

ありとあらゆるスキマを操る妖怪が存在する。その瞳は世界だけでなく、きつと深淵をも見据えているのだろう。

なーんて書いている第三話。ようやくユツカリン／こと八雲紫の登場です。勿論、タイトルも能力を示すと言う意味でこの曲を選びました。これからユツカリン／はどうなるのでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1911ba/>

東方幻想主

2012年1月10日22時45分発行